

小川未明文学館 館報



2019年度特別展 「未明と子どもたち」より

<写真>

上段：未明夫妻と両親、次女鈴江・次男哲郎・三男英二・四男優（昭和4年10月）【小川スミ子氏寄託】

下段：未明夫妻と長女晴代・長男哲文（大正元年頃）【小川英晴氏所蔵】



vol.14



小川未明文学館

新潟県上越市本城町8-30（高田図書館内）

TEL 025-1523-1108 3

FAX 025-1523-1108 6

小川未明文学館 館報 第14号

2020年（令和2）5月31日発行（年刊）

目次

【寄稿】

杉 みき子氏

「野ばら」を童謡にしてみたけど」

2

【報告】

文学館1年の記録（2019年度）

・ 展覧会

・ 各種講座など

・ その他関連事業

・ 特別展

・ 文学館講座第1回

・ 文学館講座第2回

・ 文学館講座第3回

【小川未明文学賞】

【未明ボランティアネットワークだより】

「のばら」 Vol.16

【文学館からのお知らせ】

20

18

17

14

12

11

9

8

6

4

「野ばら」を童謡にしてみたけど

杉 み き 子

(児童文学作家
未明ポランティアネットワーク顧問)



小川未明の童話を詩や童謡にするというのは、とてもむづかしいことだと思えます。なぜなら、未明童話の、ことに初期の作品の多くは、その内容自体がすでに詩の世界そのものだからです。だから、いくら手を加えてみても、というより、手を加えれば加えるほど、かえって文学作品としての原作の輝きが失われてしまうということになりかねません。

これももし、外国語で書かれた童話を日本語の詩にするというのだったら、かえって楽なのではないかと思うのですが、まあこれ

は、外国語のぜんぜんできない私の、無責任な思いこみというものでしょう。でももしないことを言うものではありません。

さて、それにしても未明童話を、詩というか童謡というか、とにかく〈うたえるもの〉にするというところみは、十分に魅力的なものでした。もともと詩的要素の濃い未明の初期童話は、実際に歌える〈うた〉として音楽と合体したときに、その美しさには、より多くのものがつけ加えられる、と思うからです。

ところが。

そう簡単には、思い通りになりませんでした。一番の誤算は、童話の内容が詩的だからといって、いや、原作が詩的であればなおのこと、それをあとから、かたちの上でも詩そのものにするというのは、いわゆる〈屋上、屋を重ねる〉ことになるわけで、どうも不遜なことだという気がしてきました。

〈童話〉と、〈童謡あるいは詩〉とでは、もちろんかたちが違います。それを無理なく読んで（あるいは歌って）もらうには、童話という一つの世界のエッセンスを引き出して、童謡あるいは詩というべつのかたち、べつの世界のものとしてまとめなくてはなりません。前に書いた「月夜とめがね」の話の、そもそもの始まりを考えました。すると、すぐぽつと出てくるのが〈めがね売りの男〉です。この男が出てこないことには、お話がはじまりません。そこで童謡では、いささかあやしげなめがね売りの男を、まず登場させました。

すると、そのあとは、思いがけないほどすると話が（歌が）はこんで、めがね売りの男は、さっと出て来てさっと消えてくれました。

このめがね売り氏のおかげで、あとの登場人物は、（月の光に助けられながら）、ごく自然に出たり引っこんだりしてくれましたので、もうあとは気らくなものでした。以下は未明さんにおまかせ、という感じで、おばあさんもごく自然に退場のチャンスをつかんだようです。「みんなおやすみ」というあの最後のせりふが、ほんとにびつたりとおさまる締めくくりでした。

未明童話の音楽化の最初のころみということもあって、この「月夜とめがね」は幾分もたついたので、つぎの「野ばら」は、ふしぎなくらい楽でした。二度目なので慣れたということもあったのでしょうか、「月夜とめがね」が茫漠たるイメージの世界であったのに対して、「野ばら」の方は、野ばらという具体的な一つの花がしっかりと中心に咲いているので、それに頼って詩をすすめていけばよかったです。（戦争と平和）という大きなテーマをとらえて、劇的な要素も十分でした。

そういえば、子どものころ、この話を初めて読んだとき、一つふしぎに思ったことがあります。それは、この二つの国が〈何かの利益問題〉から戦争を始めた、というところ。私がこの話を初めて読んだのは小学校二年くらいで、中国との戦争が始まって間も

ないころでした。当時は〈中国が悪いことばかりするので、日本は正義のために立ちあがったのだ〉と教えられていたので、戦争は正義のために始めるのだと思います。当時の教育を受けた子どもには無理のないことだったとも思いますが、だから、この物語の意味が本当にわかったのは、戦後のことでした。

さて、こういう重いテーマを含んで、しかも表面は単純なこの童話を、童謡にするにもどうしたらいいのか、いろいろ試してみました。ですが、結局は物語のダイジェストのようになってしまいました。でもまあ、〈国と国との戦い〉にかり出されて、大事な〈友〉は二度と帰ってこない、花に蜜蜂が集まっていた平和な国境が、〈風の冷たい〉国ざかいになり、平和と友情の象徴だった野ばらも枯れてしまったと、一応はまとまりましたが――。

やはり当然ながら、原作とくらべると恥ずかしくなります。未明先生、ごめんなさい。



◆文学館1年の記録◆

【展覧会】

2019年度は、特別展を2回、特集展示を4回開催しました。

特別展

〈第27回小川未明文学賞受賞記念展〉

〈会 期〉 4月2日～4月24日

〈会 場〉 文学館市民ギャラリー

〈来場者数〉 2317人

第27回小川未明文学賞の応募作品503編の中から選ばれた、大賞・優秀賞の受賞者の声とその作品を紹介しました。また、文学館で開催された贈呈式の様子、これまでの大賞受賞者とその作品、今回の最終選考まで残った作品の講評、書籍化された第26回大賞受賞作品『スケッチブック―供養絵をめぐる物語―』の校正原稿（学研プラス提供）などを紹介しました。

来場者からは、「どのような賞なのか知ることができ、興味を持った」、「自分も応募してみたい」などの感想が寄せられました。

特別展

〈未明と子どもたち〉

〈会 期〉 10月12日～12月1日

〈会 場〉 文学館市民ギャラリー

〈来場者数〉 4061人

未明の6人の子どもたちが未明の創作活動に与えた影響を示す資料や、子どもたちそれぞれの足跡を示す資料を展示し、未明の芸術を愛する心が子どもたちに受け継がれていることを紹介しました。また、未明の書く童話や未明の人間性に共感し、その思いを受け継いだ弟子や後輩たちなど「創作上の未明の子ども」と言える人々についても紹介しました。

来場者からは、「子どもたちの自筆原稿や絵画など、その歩みについて興味深く見た」、「今回多くの新資料が展示されたが、これからも新資料の発見と展示に期待している」という感想が寄せられました。

また、関連イベントとして10月27日には、未明ボランティアネットワークの協力による特別展おはなし会を開催し、33人の方からご参加いただきました。（詳細は9～10頁「特別展」に掲載）



特別展 〈未明と子どもたち〉



特別展 〈第27回小川未明文学賞受賞記念展〉

特集展示

小川未明の小説・童話・随筆等には、故郷の自然がくりかえし描かれています。未明は、「子供の時は、親しい友達を自然の中に見出す。」（『農村、都市と娯楽』、『新小説』大正14年5月）、「人間の母は、自然であります。ふるさとの自然は、その人を大きく育ててくれたものです。」（『七月に題す』、『童話雑感及小品』昭和7年7月）と述べています。また、「童話を作つて五十年」（『文芸春秋』昭和26年2月）では、「雪の深い高田の、寒い、貧しい土族屋敷に私は生まれました。その時分の生活とか、見たり聞いたりしたことが、いつまでも変わらぬ私の思想になったのだと思います。」と語っています。ひとり子であった未明は、孤独のなかで自然を友とし、北国の美しくも厳しい自然の中で育ちました。生まれてから15歳頃まで過ごした幸町周辺、その後一家で移り住んだ春日山、春日山から高田中学（現・高田高等学校）までの往復の道のり。ふるさと高田の自然は未明の心に深く刻まれ、その文学に大きな影響を与えることになりました。

そこで、令和元年度の特集展示では「四季」をテーマとし、春・夏・秋・冬それぞれの季節に関するものが織り込まれた未明作品をシリーズで紹介しました。

特集展示1

〈四季の情景〉

―未明文学にみる「春」―

〈会 期〉 3月21日～6月13日

〈会 場〉 文学館常設展示場

「春が、もう来るということを考えただけで、私たちの心は、喜びと希望にみつる。」これは、未明の随筆「春、都会、田園」(『童話雑感及小品』文化書房 昭和7年7月)の冒頭に述べられたことです。未明が子ども時代を過ごした高田は、冬の間、長く雪に閉ざされています。春に会い、愁眉を開く北国人の喜びを、おそらく南方の人々は想像することができないでしょう。一枝の花にも、一茎の緑色の芽にも、深い慈愛の眼を見据えて、彼らは、辛苦をともにした、その内の生命を慕うのであります。」と続けています。また、「冬から春への北国と悪魔的魅力」(『芸術の暗示と恐怖』大正13年7月)には「土手に、土筆や、露の臺の出る時分は、北国情趣のいっそう濃やかな時である。」と述べています。冬に自然の厳しさを痛感するからこそ、春のあたたかさ、美しさ、生命のかがやきをより一層感じることができらるでしょう。当地で過ごした未明にとって、春は「喜び」と「希望」の季節でした。本展では、小説・随筆・童話・詩など17点を展示しました。



特集展示1

特集展示2

〈四季の情景〉

―未明文学にみる「夏」―

〈会 期〉 6月15日～9月12日

〈会 場〉 文学館常設展示場

「私の夏が来ると思い出す旅の思い出は、子供の時分、よく母につれられて温泉に行ったり、また知らぬ田舎へ行ったりした三四の思い出の他ありません。」未明は随筆に繰り返し、子ども時代、夏に母に連れられて行った温泉地でのできごとを記しています。「大きくなって、自分が一人で夏に旅したことは数ありますが、それらの印象の懐かしさよりも、母につれられて旅をした頃の印象がもつ



特集展示2

と深く鮮やかであります。」また「西の山から出る夕立雲の色も、日の陰った圃の色も、また黄色な南瓜の花も、赤い桑の実も、蜂蜜のうすい輝く翼の影も、その頃の私の眼に映ったものはありありと生きています」(以上「遠き少年の日」『文章倶楽部』大正6年7月)、「やはり夏の暑い日であった。空には雲がなくて、木の葉が濡れたように輝いている木通の紫色の花が林の木に絡んで咲いているのを見た。」(『エンラン躑』『青白む都会』春陽堂 大正7年3月)という記述を見ると、未明の「夏」の記憶は「色」で鮮烈に印象づけられているように思われます。本展では、小説・随筆・童話・詩など18点を展示しました。

特集展示3

〈四季の情景〉

―未明文学にみる「秋」―

〈会 期〉 9月14日～12月12日

〈会 場〉 文学館常設展示場

「ことに、夏が過ぎて、秋風が強くなり渡った朝、栗の実を拾いに、寺の境内に行き、また、ついでに銀杏の実を拾ったこと、そして、いよいよ秋も老けて、西の山々の頂きに雪が来る時分になると、たびたびすさまじい西風が夜中吹いたのであるが、枯れた杉の大きな落枝を拾いに、冷やかな森の中へはいつていった気分は、いまだになつかしく忘れることができません。」(『ふるさとの記憶』現代『昭和3年10月』未明の「秋」の随筆には、逝く夏を惜しみ、ふるさとにやがて来る冬の厳しさを思う秋の情景が描かれています。また一方で、秋の楽しみや、秋の空の美しさ、子どもの頃のいりり端での懐かしい思い出が語られています。未明童話に表される「秋」には、コスモスが咲き、とんぼが飛び、こおろぎやキリギリスなどの虫の音が今にも聴こえてきそうな、穏やかなものが多くみられます。子どもたちは原っぱで遊び、鳥は空高く飛びます。秋になると仕事がかどるという未明は、多くの「秋」の作品を残しました。本展では、小説・随筆・童話・短冊な

ど15点を展示しました。



特集展示3

特集展示4

〈四季の情景〉

— 未明文学にみる「冬」 —

〈会 期〉 12月14日～3月17日

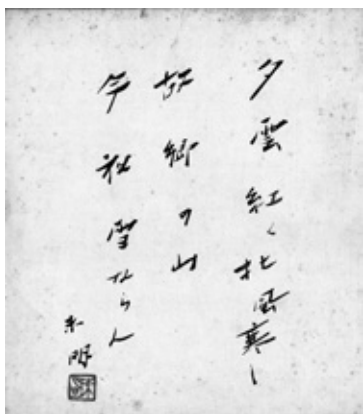
〈会 場〉 文学館常設展示場

『未明が畏怖した故郷の「美しくも厳しい自然」は、「冬」を描いた作品に最も多く表わされています。子どもの頃、母と祖母と三人、雪で家が潰される脅威に耐えた夜。炬燵にあたって母から聞いた恐ろしい話。都会に出てからも、冬が来ると故郷の両親のことを考え、烈しい冬の苦闘を思いました。一方で、赤い夕焼け、雪に埋まった木立という穏やかな風景も思い浮かべます。久しぶりに故郷

の冬に接したときには、自然の雄偉を感じ、あらためて越後の冬の美をたたえずにはいられませんでした。

「凍った雪は、硝子を砕くように、足の下で鳴りました。冬の夜の空は、青黒く冴えて、星の光りは、いつもより大きく、橙をつるしたように散らばっています。西風は、気むずかしげに裸になった梢でささやきました。」（『雪の碎ける音』『令女界』昭和5年2月）未明が子どもの頃に出会った、故郷の美しい冬の夜の描写です。

本展では、小説・随筆・童話・色紙など18点を展示しました。



特集展示4

〔各種講座など〕

朗読研修会

〈日〉 6月7日・6月28日・7月5日の全3回

高田図書館会議室

〈会 場〉 高田図書館会議室

〈参加者〉 19人

橘由貴氏（朗読療法士・ヴォイスアーティスト）を講師に、朗読研修会を開催しました。

はじめに基本的な声の作り方や表現力の磨き方、発声練習方法の大切さを学び、「朗読とは、聞き手がいて、相手の心を動かすこと、聞いている人の心に届くことが大事」「気遣いや心遣いが必要。相手にどう聞こえているかを考える」「朗読においては、自分の体を楽器だと思ふこと。楽器を弾くには訓練が必要。声を訓練する」という講義に耳を傾けました。次に発声練習や開口訓練を行い、その後、未明童話「ある夜の星たちの話」（『時事新報』大正13年1月）を題材に実践的な朗読を行い、講師から個々に指導を受けました。また、講師の朗読を聴き、受講者の今後の朗読練習の参考にしました。



朗読研修会

童話創作講座

〈日〉 6月15日・7月20日・7月27日の全3回

高田図書館会議室・高田公園オーレンプラザ会議室

〈会 場〉 高田図書館会議室・高田公園オーレンプラザ会議室

〈参加者〉 13人

小川未明文学賞の最終選考委員である佐々木赫子氏（児童文学作家）を講師に、短編童話の書き方を学びました。

1回目の講座では、初めにテキストを用いた講義を受け、テーマや構成についてアドバイスを受けた後、受講者各自が創作した童話の講評をいただきました。さらに、受講者同士でお互いの作品について意見を交換しあい、今後の創作の参考にしました。

2回目・3回目の講座では、アドバイスをを受け、直した作品の講評をいただき、最終的に作品を仕上げました。

受講者の皆さんの作品は、「童話創作講座受講者作品集」として、文学館の図書コーナーや市立図書館で読むことができます。



童話創作講座

こどもプログラム 小川未明文学館こども祭

〈日にち〉 5月11日

〈会場〉 文学館「出会いのロビー」

〈参加者〉 203人

未明童話や文学館にさらに親しんでもらうため、2017年度から小川未明文学館こども祭を開催しています。

3回目となる今回は、未明童話「月とあざらし」をテーマとしたモビール作りや未明のめがねを探すクイズを実施し、

幼児から小学生を中心に大勢の方にご参加いただきました。



小川未明文学館こども祭

文学館講座

〈日にち〉 10月19日・11月16日・11月30日

〈会場〉 高田図書館会議室

〈参加者〉 延べ97人

特別展「未明と子どもたち」の開催にあわせて、未明やその「子どもたち」について学ぶ講座を3回開催しました。

講師は、第1回 小笠裕二氏（上越教育大学副学長・小川未明文学館専門指導員）、第2回 小川英晴氏（未明の孫・詩人）、第3回 山根知子氏（ノートルダム清心女子大学教授）でした。

（詳細は11～16頁「文学館講座」に掲載）

文学館おはなし会

〈日時〉 毎月第2・4日曜日

午後2時～

〈会場〉 文学館ビッグブックシアター

〈参加者〉 延べ198人

未明童話の魅力を伝えるため、未明ボランティアネットワーク（朗読ボランティア）の協力により未明童話を中心としたおはなし会を20回開催しました。

出張おはなし会

未明童話に出会う機会をより多くの方に提供するため、未明ボランティアネットワークが市内の小学校や放課後児童ク

ラブに向いて、おはなし会を開催しました。

2019年度は、市内小学校14校、放課後児童クラブ16か所、合計30か所（1315人）を訪問しました。



文学館おはなし会



出張おはなし会

こどもプログラム 未明童話と親しもう

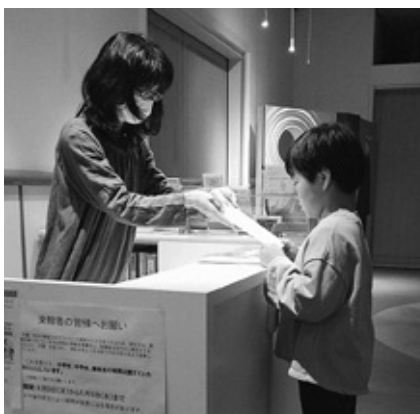
— こどもたちに届けたい未来のメッセージ —

未明童話といえは「赤い蠟燭と人魚」「月夜と眼鏡」などが有名ですが、このほかにも素晴らしい童話が数多くあります。これらを子どもたちに読んでもらうために、月替わりで未明童話1作品を冊子にして無償配布しました。配布作品は、幼児から小学校の低中学年向けの童話を中心にとなっています。参加者にはスタンブカードを配布し、スタンプ数に応じて、文学館オリジナルグッズをプレゼントしました。2019年度は、延べ606人に冊子を配布しました。

〈配布童話〉

- ・ 4月「ちようちようとばら」
(初出『子供之友』昭和8年5月)
- ・ 5月「おやうしとこうし」
(初収録『小豚の旅』昭和10年5月)
- ・ 6月「小ぶたのたび」
(初出『コドモアサヒ』昭和10年3月)
- ・ 7月「武ちゃんとかに」
(初出『コドモノクニ』昭和8年8月)
- ・ 8月「雲、雲、いろいろな雲」
(初出『コドモアサヒ』昭和5年7月)
- ・ 9月「でんしゃのまじから」
(初出『日本の子ども』昭和23年7月)
- ・ 10月「お月さまと虫たち」
(初出『コドモノクニ』昭和7年10月)
- ・ 11月「ハーモニカをふくと」

- (初出『コドモノクニ』昭和8年10月)
- ・ 12月「雪のふったばんのはなし」
(初収録『未明カタカナ童話読本』昭和11年3月)
- ・ 1月「やねへあがったはね」
(初出『コドモノクニ』昭和9年1月)
- ・ 2月「にらめっこしましよ」
(初出『コドモノクニ』昭和7年3月)
- ・ 3月「うまれたばかりのちようちよう」
(初出『コドモノヒカリ』昭和12年3月)



未明童話と親しもう

未明童話のぬり絵

文学館の「出合いのロビー」では、数種類の未明童話のぬり絵をご用意しています。小さなお子さんから大人の方まで、大勢の方楽しんでいただいております。ぬり終わった絵はロビーの掲示板に展示しています。



未明童話のぬり絵



【その他関連事業】

小川未明連絡会議合同イベント

〈未明童話の世界を感じよう〉

〈日にち〉 12月22日

〈会場〉 上越文化会館

「未明フェスティバル2019」(上越文化会館主催)の開催にあわせて、小川未明連絡会議構成団体による合同イベントを行いました。

当館では「出張小川未明文学館」とし

て未明紹介パネルの展示、未明フェスティバル来場者への「野ばら」テキスト無償配布、絵本読書コーナーの開設を行いました。また、小川未明研究会(小笠裕二氏主宰)によるTシャツやクリアファイルなどの未明オリジナルグッズ、未明オリジナルフード(クッキー)の販売、上越詩を読む会による未明童話にちなんだ詩のパネル展示、未明ボランティアネットワークによるペーパークラフト講座を行いました。



未明童話の世界を感じよう

2019年度特別展

未明と子どもたち

〈会期〉10月12日～12月1日

〈会場〉文学館市民ギャラリー

明治39年に24歳で結婚した未明は、翌40年に長女晴代を、41年に長男哲文を授かりました。42年に雑誌記者を辞め文筆で立とうと決意しますが、生活は困窮し二児は栄養不良となります。大正2年次女鈴江出生、翌3年哲文が疫病で死去、5年次男哲郎出生、7年晴代が開放性結核で死去と、未明は立て続けに喜びと悲しみを味わい、生と死に真正面から向き合いました。大正10年「赤い蠟燭と人魚」を発表した2月に三男英二出生。大正15年四男優出生後の5月、未明は「今後を童話作家に」を発表し、小説の筆を折り童話に専念することを決意しました。

本展では、6人の子どもたちが未明の創作活動に与えた影響を紹介するとともに、翻訳家や作家として活躍した鈴江の自筆原稿や、画才に恵まれ一陽会の会員であった哲郎の絵画、英二の子で詩人の小川英晴氏（未明の孫）の自筆原稿などを展示し、未明の芸術を愛する心が子どもたちに受け継がれていることを知っていただく機会としました。

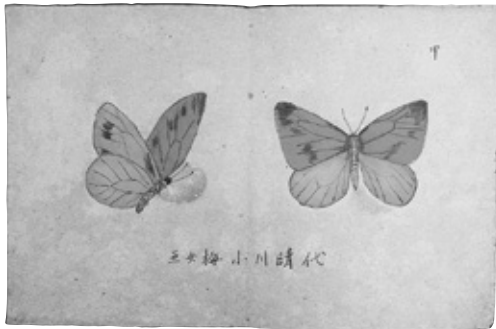
また、未明の書く童話や未明の人間性

に共感し、その思いを受け継いだ弟子や後輩たち「童話作家・未明の子ども」と言える人々や、未明童話を読んで感想を児童雑誌に寄せた全国の子どもたちの声も紹介しました。

■第1章 亡くした子どもたち

未明は貧苦の中で、6歳の長男と11歳の長女を亡くしました。二児を相次いで失った未明の悲しみは深く、自筆年譜には「貧困時代の二児を失うて、悲しみ骨に徹し、はなはだしく鞭打たる。」と記されています。このような状況の中で、大正8年1月『読売新聞』に、未明童話の代表作のひとつとなる「金の輪」が発表されます。この作品には子どもたちの病氣と死が描かれており、愛児の死を見つめた未明の思いが作品中に表れています。また、大正7年刊行の童話集『星の世界から』の扉に「病床にある長女晴代子のために」とあるように、この二児の存在が、それまで小説を自らの中心に据えていた未明を童話に向かわせた一因であると言えるでしょう。亡くなった子どもたちの心に寄り添い子どもに分まで精いっぱい生きよう、社会的弱者が苦しむこの社会を変えたいという思いが、その後大正中期から後期にかけて「赤い蠟燭と人魚」「野薔薇」「月夜と眼鏡」など、今日もよく知られる童話を次々と生み出しました。小説では、貧しい人が生活に苦しむ現実を見つめ、それを作り出す社会の矛盾を

改めようと、社会主義的な思想に基づいた小説を多く発表しました。この章では、晴代・哲文の遺品や2人を通して創作した未明の小説や童話、その成立背景を紹介しました。



長女晴代の絵（大正7年頃）【小川健一氏所蔵】



未明と長女・長男（明治44年頃）【小川英晴氏所蔵】

■第2章 伸びゆく子どもたち

未明には他に、三男一女がいました。この4人は無事に成長し、未明の作家活動の支えとなりました。次女鈴江は翻訳家や作家として活躍する一方で、父未明についての回想記で未明の生い立ちや人柄を著しています。次男哲郎は画才に恵まれ、画会の一陽会で活躍する一方、未明童話集の挿絵や装丁にも携わりました。三男英二は製造業の会社を起こし、さまざまな製品で特許を取得しました。四男優は国民金融公庫勤務を経て、英二の会社で専務として勤めました。

「童話作家宣言」以前の未明の童話は、ロマンチズムに基づく大人のための童話や、社会主義思想に基づく童話が多かったのに対し、宣言以降は子どもを対象としたカタカナ童話やひらがな童話の創作にも力を入れました。

未明一家は昭和5年杉並区高円寺に新居を購入し、それまでの手狭な借家生活に別れを告げました。当時の高円寺は緑豊かな郊外で、転居は子どもたちをのびのびと育てるためだったのでしょう。昭和に入ってから未明の書く童話は、子どもの目線で日常を描く、純粋に子どもたちが楽しめるものが増えていきました。それは自分子どもたちが日々学び、遊ぶ姿を見ての変化だったのかもしれない。未明は、子どもたちの進む道については、何一つ口出ししませんでした。ただ「なるなら人間としてしっかりしたも

のになれ」とだけ言いました。

この章では、4人の子どもたちの足跡やその仕事、未明の孫たちについて、また英二の子で詩人である小川英晴氏の詩の世界を紹介しました。

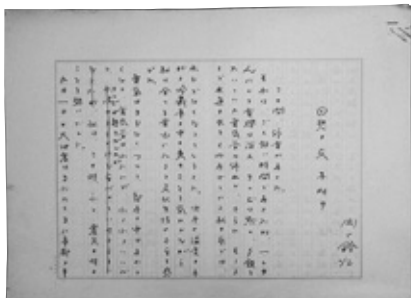


次男哲郎画
未明童話「なまずとあざみの話」
(昭和28年)【小川健一氏所蔵】



「出征する哲郎と家族」(昭和13年)【小川健一氏所蔵】

■第3章 文学上の子どもたち
明治41年、未明は新ロマンチズム文学研究のため「青鳥会」を起こします。新井紀一、宮地嘉六、坪田譲治、浜田広介、藤井真澄など、早稲田の学生を主力とする創作合評会で、会名はメーテルリンクの「青い鳥」にちなんで未明が命名しました。坪田譲治、浜田広介は、のち



次女鈴江自筆原稿「回想の父未明」
(昭和41年)【小川英晴氏所蔵】

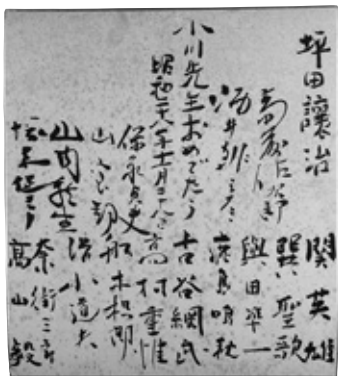


「未明の誕生日祝いに集まった家族」
(昭和28年4月12日)【小川スミ子氏寄託】

に未明とともに「児童文学界の三種の神器」と称されるようになります。児童文学作家の酒井朝彦、奈街三郎、宮原無花樹、船木枳郎らは、未明童話との出会いがきっかけで児童文学を志し、未明に師事しました。児童文学作家・評論の関英雄、評論家・翻訳家の山室静は、少年時代からの未明童話の愛読者でした。宇野千代は未明の作風や人柄を尊敬し、未明のもとへ通いました。上越市高田在住の児童文学作家杉みき子は、小学生のときに未明が自分と同じ小学校の出身だと知り、童話作家を目指しました。

これらの人々は皆、未明の作品だけでなく、その人柄を愛し敬い、未明のもとへ集いました。未明も弟子や後輩たちを愛し、酒を酌み交わしあって意見をたたかわせました。

この章では、未明の「文学上の子どもたち」と言える児童文学者たちの足跡や、未明との交流を示す資料を紹介しました。



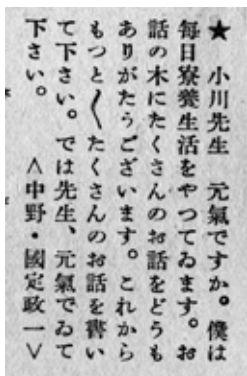
未明が文化功労者に選ばれた際に後輩たちから贈られた色紙
(昭和27年11月)【小川英晴氏寄託】



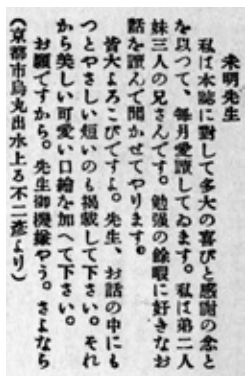
「未明と児童文学者たち」
(左から、楠山正雄、未明、坪田譲治、浜田広介)
(昭和24年2月)【小川スミ子氏寄託】

トピック 未明を慕う子どもたち

童話雑誌『おとぎの世界』『童話』『お話の木』に掲載された、未明に宛てた全国の子どもたちからの手紙を紹介しました。未明童話を心待ちにしている気持ちを表し、未明の健康長寿を祈る手紙です。



★ 小川先生 元気ですか。僕は毎日寮生活をやつてゐます。お話の木にたくさんのお話をどうもありがとうございました。これからもっとたくさんのお話を書いて下さい。では先生、元気です。下さい。
△中野・國定政一▽
【お話の木】
第2巻第2号(昭和13年)
【小川未明文学館所蔵】



未明先生
私は本誌に對して多大の喜びと感謝の念を以つて、毎月愛讀してゐます。私は弟二人妹三人の兄さんです。勉強の餘暇に好きなお話を讀んで聞かせてやります。皆大よろこびです。先生、お話の中にもつとやさしい短いのも掲載して下さい。それから笑しい可愛い口輪を加へて下さい。お願ひですから。先生御機嫌下さい。さよなら
(京都市島光出水上る不二齋より)
【おとぎの世界】
第1年第5号(大正8年)
【小川未明文学館所蔵】

文学館講座（講座要旨）

第1回

小川未明の死生観

講師：小埜裕二氏（上越教育大学副学

長・小川未明文学館専門指導員）

期日：10月19日（土）

会場：高田図書館会議室



はじめに

「自分がなければ一切のものが無い、すべてのことが我を措いてほかにない」この未明の言葉が本日の講座のキーとなるものです。「貧困時代の二児を失うて、悲しみ骨に徹し、甚しく鞭打たる」この言葉ももう一つのキーセンテンスです。子どもを亡くす前は、「自分がなければ」：「そういう思いで未明は生きていました。」

未明の生地は現在の上越市幸町です。江戸屋敷にいた下級武士が大政奉還で明治初めに高田へ戻ってきたさい、幸町に長屋が作られて住むようになります。今回、新たな調査で、未明の祖父平四郎が

当時、二軒分の長屋を保有していたことが分かりました。またその南半分が畑であることも分かりました。祖父母は一人娘（未明の母チヨ）に養子（未明の父澄晴）を迎えるため、長屋を二軒保有したのでしょうか。

後に小川家は一家で春日山へ転居しますが、明治38年、未明の父澄晴は幸町に再び土地を買っています。ところでその土地の名義は大正4年に晴代（未明の長女）の名義に移されました。晴代が病気で亡くなった後、大正9年4月には小川健作（未明）とキチ（未明の妻）の名義になり、その後大正10年に売り払われます。17年間、何のためにこの土地を保有していたのでしょうか。

当時、東京にいた未明の家族は貧しく苦しい状況に置かれていました。未明の長女晴代を預かることで、未明一家の東京での暮らしを助けようと思った親の気持ちが察せられます。かつて祖父母が一人娘のために長屋を二軒保有したように、今度は父が一人息子のために土地を用意したわけですね。

子供の幸せを願う親心が、世代を超えて伝わっているのが分かります。子供への愛は、小説の中にも色濃く表れてきます。子供が亡くなった時の未明の痛切な思いを綴った小説を読むとほんとうに胸を打たれます。

未明の「無常観」

大正3年8月『文章世界』の「趣味と好尚」のアンケート「あなたが一番幸福に思うことは？」に対する未明の回答は、「他人の死を聞く時、また見た時、生きてもる自分を幸福と感ず。」でした。いささか首をかしげざるを得ない回答です。未明はエゴイストだったのでしょうか。しかし、最近はこの言葉に未明の当時の死生観の特徴がよく表れていると思うようになりました。

15歳の頃、未明は父澄晴が上杉謙信を祀る春日山神社を建てたことで、春日山へ移り住みます。その中で自然の大きさと人間の小ささを対比的に捉えるようになります。自然は永遠、しかし人間は有限というわけです。他方、未明は、北国の厳しい自然の前に沈黙を強いられる人々、貧しさにあえぎ病を治すことがで



講師の小埜裕二氏

きない人々の現実を見ながら、無常の思いを強くします。無常の思いを抱く未明は無常の中で静かに暮らすこと。もう一つは短い人生を精一杯生きること。

しかし、未明の無常の受け止め方は、当初、人間の弱さやはかなさを宿命的なものとして受けとめる消極的なものに傾いていました。世道人心のために生きたいという願いも上杉謙信の影響から抱いていましたが、この思いは先の宿命観ゆえに実践に結びつくことはありませんでした。

この無常観や宿命観に留意しながら、大正3年2月発表の小説「落日」を見てみます。この小説では、裸足で菓子売り歩きしている少年を見て「人生は不平等だ」と思う場面があります。また青年が列車事故で唐突に亡くなる場面もあります。そのとき主人公は、ただ生きていくだけでも幸福だと思ってしまうのです。

先のアンケートの回答は、エゴイストの発言というより、今生きていることを幸福に思うがそれは永遠ではない、今私は生きていくが、すぐに自分の番が来るという思いから発せられた言葉なのでしょう。人の世の無常を宿命と思い、今生きているのは奇跡のようなものだという思いが「落日」には流れています。

未明は若い頃、冒頭で述べたキーセンテンスを繰り返し用いています。「自分を離れて悲しみもなく、喜びもなく、幸

福もなく、また不幸福もない。「人生は、自分を離れてあるものではなく、又、社会は自分を離れて存在するわけのものではない。」こうした考えを未明は当時の思想の核にしました。

この考えは、未明が早稲田大学在学中、華嚴の滝に身を投げた藤村操の遺書「巖頭之感」に関して、坪内逍遙へ述べた未明の言葉に端を発します。「自分がなければ一切のものが無い、すべてのことが我を置いてほかにない。」の言葉は、未明の胸に宿ったまま長く影響を与え続けます。強い無常観、宿命観の中で、強烈な個人主義にしか生きる道を見出せなかったわけです。未明が愛児哲文を亡くすまで、この思いは続きます。

■死生観の転換

長男哲文が亡くなったのは大正3年12月です。先のアンケートの回答が大正3年8月でした。「他人の死を聞く時、また見た時、生きてゐる自分を幸福と感ぜず。」こんなことを述べていた人間が数か月後に自分の息子を亡くす体験をするこの落差が、未明の死生観に変化をもたらしたと考えます。

未明の子供は疫病で急逝しました。長男哲文の死を経験した未明は、アンケートの回答とは正反対の気持ちを抱いたはずです。自分の息子の死に接し、生きてゐる自分を幸福と感ぜずというふうには思わなかったでしょう。人の生死は宿命な

んかではない、弱いもののために何かをしなくてはいけないのだという思いに変わっていったのです。

子供の死を経て、悲観的な宿命観から、世道人心のために生きていかなければならないという思いを強く表したのが、「貧困時代の二児を失うて、悲しみ骨に徹し、甚しく鞭打たる」の言葉でしょう。(大正7年12月に未明は長女晴代を結核で亡くしています。)

春日山から北の方を見ると日本海が見えます。日本海は未明にとって沈黙の世界で、無常の世界を意識させるものでした。他方、海の見える春日山神社に未明は後年、有名な「雲の如く高く 雲のごとくかがやき 雲の如くとらわれず」の詩碑を建立します。宿命観に囚われていたものの象徴が日本海の黒く荒い海によって示され、子供の死を受け、強く生きようとする思いが「雲のごとく」の詩碑によって託され表されています。

子供の死により鞭打られた未明は、世道人心のために尽力しなくてはいけないと思うようになりました。子供の死は未明が幼いときから憧れていた上杉謙信の義の心を実践する強い動機となり、社会主義は義の心を実践する思想的器となりました。未明の死生観は愛児を喪った時に社会主義を受け入れる形で大きく変化していきます。

「死の凝視によって、私の生は跳躍す」という未明の随筆があります。未明は生

の凝視、子供の死を介して、厭世思想から遠ざかっていきました。二児を亡くした未明は、亡くなった子供の分まで生きようという使命感を持ち、社会の姿を変えようという実践的態度を示すようになります。また、もつと子供の心や気持ちに寄り添おうとする思いを強くし、それが未明の童話創作へつながっていききました。

未明の童話を読んでいると、戦争中の童話でも、戦地に行く人の心に寄り添おうとする態度が示されているのが分かります。小説世界においても、本当の人の気持ち、貧しい人達の現実をリアルに描こうとしました。



第1回文学館講座

第2回

小川未明と子どもたち

講師…小川英晴氏(未明の孫・詩人)
聴き手…小椋裕二氏(上越教育大学副学

長・小川未明文学館専門指導員)

期 日…11月16日(土)

会場…文学館市民ギャラリー



小椋…今日は、未明の孫である小川英晴さんに、小川家のファミリーヒストリーをお伺いします。

英晴さんは昭和26年、未明が69歳の時に生まれたお孫さんです。父である未明の三男英二さんの「英」という字と、未明の父澄晴の「晴」という字が使われていますね。

小川…僕の生まれたのは9月13日。当時の謙信祭の日でした。

小椋…謙信公祭は未明の父澄晴が始めて、今に至っています。

英晴さんは未明の記憶はありますか。
小川…小学校の3、4年くらいまで存命だったので、いくつか覚えていたことがあります。春に高円寺の家に行くと、玄関に蘭のいい香りが漂っていました。未

明は蘭と会話しながら、葉の埃を一枚一枚取ったりして大事に育てていました。

その頃もう未明は足が悪くて寝ていることが多かったですが、野鳥も非常に好きでした。

小埜…未明は花や植物、骨董を集めるのが好きで、英晴さんは伝書鳩がお好きですよね。お二人とも小さいものへの愛情があるのだなと思いました。

英晴さんは、ねじめ正一さん(作家)とはいとこ同士になるそうですね。お母さんの妹の子ども。芸術家の血筋ですね。未明は英晴さんの小学校入学祝いに短冊を贈っていますね。

小川…未明の日記を読んだら、英晴にランドセルを買って、短冊を書いてあげたという記述がありました。私が肩を揉んであげるとそれだけでも涙ぐんで、感涙の祖父でした。

未明のところには毎月たくさんの児童書が送られてきまして、好きなものを持って帰っていいよと言われました。毎月孤児院にも送っていたようですね。

小埜…未明は助け合い、相互扶助を大切にしていました。

家族の皆さんが未明の家に集まる機会はありませんか。

小川…未明はお酒が好きで、おいしそうに飲んでいたので覚えています。家族が未明の家に集まると、始めは仲良く話しているのですが、みんな気性が激しいので、そのうち大げんかになる。犬と猫、

どちらが良いかというようなことでけんかするので。うちは犬を飼っていたので犬派。僕が小学校の時は学校にまで付いてきてしまった兄のような存在で、一緒に育った犬でした。

小埜…未明の子どもの頃の話と同じですね。幸町、春日山に住んでいた時の未明も、行くところ必ず犬が後を付いてきたそうです。

未明は優しいおじいさんでしたか。小川…全然怖くない、優しいおじいさんでした。父母を大事にしなさいと毎回言われました。

未明の書く童話は暗いと言われますが、家の中は笑い声が絶えませんでした。おばあさん(未明の妻キチ)はしっかりと書いて、優しいけれど厳しい人でした。小埜…英晴さんが詩を書くようになったきっかけは。

小川…中原中也や北原白秋の詩を読んで言葉の美しさに心打たれて、その美しい世界の近くで仕事ができたら、どんなにすばらしいだろうと思いました。未明も本当は詩人になりたかったそうです。

だったら僕が詩人になろうと、美の世界を追及したいと思いました。未明童話の持つ美しさ悲しさ、虐げられた者や弱い者を代弁する気持ちを持っていたいなと思っています。

小埜…そういうことを伝えるための器として詩があるのですね。未明はせっかちな性格だったようです

が、どう思われますか。

小川…未明の父澄晴も気が短かったようですが、春日山神社を作るために長年苦労しました。未明もせっかちだったけれども耐えて、自分の仕事と決めたことを一生かけてやりました。一生かけてやる、それが大事なのだと思います。



講師の小川英晴氏

小埜…伯母さん(未明の次女岡上鈴江)の思い出がありますか。

小川…私は伯母と激しくケンカして2、3年行かなくなりましたが二度ありました。伯父に、なぜ伯母と結婚したか聞いたことがあります。「当時の女性にはない自分なりの思想があり、物事に前向きであつたから。」と言っていました。

伯母は文章を書いていて、小学校か中学校の時に、親に黙って賞に応募したのが入選したらしいです。自分の気持ちをすぐ言葉にできる力を持っていた。僕が頻繁に行き来していた頃、伯母の家には児童文学の作家が多く訪ねてきていました。

伯母は家族の中心的人物でした。未明はギリギリの生活をしていて子どもたちにも何も買えない状態だったので、伯母は外務省で働いた給料で私の父(未明の三男英二)に小さいカメラを買ってくれました。弟の面倒をよくみた。自分の生活は慎ましかったです。

小埜…未明もお金に強く執着することはなかったですね。

小川…お金に執着したら、作家活動はやっていられなかったと思います。それを越える信念があつたから続けられた。お金より大事なものはいくらでもありません。

小埜…伯父さん(未明の次男哲郎)はどんな人でしたか。

小川…子どもの時に病気になったため、学校へ行くのを断念して画家の道を進んだようです。牧野虎雄や鈴木信太郎などに師事しました。また、小学館に勤務し、小学1〜3年生の絵の選者をしていました。

小埜…哲郎さんのお宅はまだ残っていて、未明や哲郎さんの資料がたくさんあります。

英晴さんから見たお父さんは。

小川…町の発明家のような感じで、いつもなにか考えていました。トランジスタの拡声器を作って、選挙で使われた。真空管の時代ですから、電池を使って持ち運びができる製品は、当時としては画期的でした。

巽聖歌（児童文学作家）から「英ちゃんを童話作家にしたかったのに」と未明が言っていた、という話を聞いたことがあります。

小笠…未明の詩人的側面は英晴さんに、作家の才能は鈴江さんに受け継がれた。そして物を作る形で英二さんが受け継いでいる、ということですね。

大正初期の未明童話に出てくるのは雪国の子どもで、未明の子ども時代の分身のようです。ところが昭和に入り、未明の子どもたちが成長していくと、童話で描かれるのは、東京の郊外の原っぱで遊んでいる子ども姿です。これは実際の未明の子どもたちを描いたものなのでしょうか。

小川…私の父が子どもだった頃、未明は自分の子どもたちに、今日は何をして遊んだか、今日何があったか聞きたがったそうです。現実の子どもと向き合い、今の子どもは何を考えると向き合います。小笠…未明童話「青空の下の原っぱ」は、英晴さんのお父さんがモデルになっているそうですね。

叔父さん（未明の四男優）は、未明が亡くなるまで同居していましたね。

小川…小川電子工業という会社を父がやっていて、途中から叔父が国民金融公庫を辞めて入社しました。叔父さんも小川家の特質を持っていて、気が短くて頑固なので、よく父とケンカしていました。最後は後継者がいなかったたので会社は解散しました。私に跡を継いでほしいという親の期待に応えられなかったのは残念だけれど、考えてみれば父も未明の跡を継がなかったし、未明も神社を継がなかったし、許してもらいたいなど。

小笠…皆さん信念を持って、それぞれ違う道を選ばれたんですね。

小川…父も伯母たちも未明の生き方を尊敬していた。だから生活が苦しくても、みんなそれに耐えて応援してきました。

小笠…未明の50年以上に渡る作家活動、内も外も含めご家族は見てきた。父母の生き方は尊敬できる、そういう思いを抱いていたんですね。

上越市では未明の研究や顕彰活動をしています。今後の市民の活動に期待されることはありますか。

小川…ボランティアの読み聞かせなどの活動に感謝しています。皆さんお体に気を付けて、長く続けることが大事だと思います。年と共に読み方も変わってくる。人生が長くなると、経験の深さ、思いの深さが増し、朗読にもそれが表れます。それが長く生きることの良さであり、魅

力であると思います。

未明童話と向き合うと、さらに深い世界が見えてきます。童話を読むことによって、未明を発見するのではなく、自分の中の何かを発見する、そういう読み方があるのです。未明文学賞も文学館での活動も、このままずっと続けていけたら素晴らしいですね。



第2回文学館講座

第3回

小川未明と坪田譲治の師弟愛

「私は君のことを思わない日はない」

講師…山根知子氏

（ノートルダム清心女子大学教授）

期日…11月30日（土）

会場…高田図書館会議室



はじめに

私は宮沢賢治と坪田譲治、二人の研究をしてきました。坪田譲治は「日本児童文学のリアリズムの祖」と言われています。一方、宮沢賢治は「児童文学のファンタジーの祖」と言われますが、小川未明はリアリズム、ファンタジー両方合わせた祖であると言えるのではないかと思います。

今日は、小川未明と坪田譲治の関係性についてお話しします。改めて諸資料を調査分析したところ、私が思っていた以上の師弟愛の深さを感じて感動し、皆さんにお伝えしたいと思いました。

新たな調査をしました。二人が出会った場所、東京都新宿区の早稲田です。お互いの住居がどれくらい近い位置か、どれ

くらの頻度や距離感で会っていたか、実際歩いて知ってみたいと前から思っていて、古地図を入手して巡りました。私は岡山市出身で早稲田大学に入りました。二人の後輩になります。私自身18歳の頃から15年間東京・早稲田で過ごしました。今回の調査は私も慣れ親しんだ早稲田が二人の交流の場であることを見直すことができ、懐かしくもあり新しい発見も多かったです。

二つ目の調査は二人の手紙です。岡山の吉備路文学館に、譲治に宛てた未明の手紙がたくさんあることは以前から確認していました。二人の交わした手紙は、現在全集などには発表されておりません。そこで今回はその手紙の内容についてのご報告ができるよう目指して研究してきましたので、この場で初披露できることを楽しみにしております。

今回の副題「私は君のことを思わない日はない」という言葉は、未明の譲治あての手紙の一文から使いました。譲治が未明と出会って亡くなるまでの間、50数年の年月を二人は共にしました。今回の展示では「未明の子どもたち」の中に、弟子という存在である譲治も並べられていますように、血の繋がりはなくとも、譲治は未明の子どものように目をかけてもらっていたと、書簡からも感じました。

■未明から譲治への手紙

まずは未明から譲治への書簡を紹介し

ます。吉備路文学館の所蔵資料です。

坪田譲治は大学を二度退学、一度休学をしていて、合計7年かけて卒業しています。入学後まもなく作家をめざして未明に師事した譲治は、作家は神経衰弱にならないと深い文学が書けないと思ひ込むなかで、精神的に病んで、退学して故郷に帰ります。しかし、19歳のとき、家族にも言えない悩みを未明に打ち明け、保証人になってもらってもう一度大学に籍を置きました。明治43年、20歳の時の11月、徴兵検査延期願の提出不備による入営のために一時退学しています。その時出された譲治あての未明の手紙には、「身体を鍛え、経験を積むと思つて行つて来たまえ。(中略)まず当面一歩一歩運命にしたがつていくなり、人生は仕方がないと思います。」と書かれています。この頃未明から受けた創作指導の思い出を、譲治は随筆に書いています。書いた作品を目の前で読みあげさせ、耳で聞き、それをすぐに評価する。未明は、譲治の不安を払拭するように、詠嘆的な口調で激励し、譲治が感激して創作に熱中するように導きました。

大正元年9月、譲治が肺炎カタルで入院したときの手紙では、未明は「御病気が大して悪くないので何より安心いたしました。(中略)早くなおって帰って来たまえ。お大事に願います。」と書いています。翌年4月には、未明は譲治に、体をいたわることと、ロシアの小説の主

人公を引き合いに出して、苦難(病気)の中でも人生をどう生きていくべきかを手紙の中で語っています。また、同年6月の手紙では、「私は君の強い思想と作物に接する心を期待しています。」「お互いに勇士となつて力の限り戦いましょう。」と書き送っています。作家としてまだ何者でもない譲治を、「私は君のことを思っていない日はない。」と心配して期待をしているという未明の譲治への師弟愛は何と深いことでしょう。未明の心の中で譲治がどんな存在であったのか、思はれるところです。生きることと文学は表裏一体。譲治の人格や思想に、未明はすでに魅力を感じていたのではないのでしょうか。出会いの最初の数年のことが、その後の生涯にも繋がっているように思います。

大正3年、未明の長男哲文が6歳で疫病のため亡くなります。その時のことを譲治は随筆に鮮明に書いていますが、譲治自身、病院へ駆けつけ、涙にくれる未明を目の当たりにしました。大正14年、譲治はその時のことを彷彿とさせる小説「コマ」を書きました。譲治は子どもが亡くなる作品を、「コマ」を契機に何作品も書きます。子どもを亡くした未明の姿を見ながら、また未明の「金の輪」を読むことによつて、譲治自身は大きな刺激を受けたのでしょう。未明の子ども観や創作姿勢からの影響関係を見ることができます。

大正6年2月の手紙は、「頼んだ」バラをまだ買っていないなら、買うのを見合わせてください。」といった内容です。植木を育てる趣味を共有していた、ほのぼのとした二人の交流が分かります。

関東大震災の際、身の危険を感じた未明は、一家で譲治の家に数日避難しました。2年後の大正14年9月、そのことを思い出して改めてお礼を述べる内容の手紙を送っています。この頃になると、譲治が未明の作品の評価を雑誌に書くという機会があつたようで、譲治の批評を読んで未明が自省した内容についても手紙で書き記しています。また、譲治は未明の出版物や編集物の協力をするようになっていました。



講師の山根知子氏

譲治は昭和12年〜14年頃には生活の苦しさから解放されて、やっと旅行らしいものができるようになりました。その行き先が長野県野尻です。未明がたびたび高田に帰る話題をして、その路線の途中の場所ということで二人の共通の話題になりうる野尻を選んだのではないでしょう。譲治はある農家の建物を買って、そこで疎開をして、戦後までいました。黒姫童話館には、松谷みよ子さんから弟子たちが、譲治の碑を建てています。譲治は当時の村長から「野尻を学者や児童文学者が集う村にしたい」と頼まれ、色々な児童文学者を紹介してあの辺が児童文学者の別荘地になったわけです。そうした経緯で、黒姫童話館もできました。未明との交流が発展した地と言えます。

昭和15年5月の手紙では、譲治が編集と解説を手掛けた未明の童話集の進み具合について尋ねています。その童話集である昭和16年発行の未明著『大きな蟹』の「あとがき」で、譲治は未明の書く童話の美しさを「先生の童話はいつでも暗い中の美しさ、不幸の中の幸福が描かれている」と書いていますが、私自身、譲治の作品も、逆境や困難な状況下でのいのちの美しさのほとばしりを描いていく、そういう作家であると思っていました。譲治自身が未明をそう捉え、自分も意識的にか無意識的にか、その影響を受けていたものと思われまます。

同年同月の別の手紙では、未明は「譲

治の）お帰りを待って、御協議を願ひ、全集の話を進めたいと思つています。いつ頃御帰京でしょうか」と問い、編集を手伝っている譲治を頼りにしていることがうかがえます。

昭和20年8月、終戦の4日前、疎開をしている野尻の譲治に向けての手紙では、人々の心がすさんでいく様子を嘆いています。譲治が野尻湖で釣りを楽しんでい

ることも、未明は手紙のやりとりで知っていました。

ここで、お互いのことを書いた随筆の内容を紹介いたします。譲治は「少年よみの研究 小川未明論」で、未明は児童の心を代弁してくれており、未明文学はそのような方向での愛情に裏打ちされていると述べています。一方未明は随筆「神秘 派作家の風貌」で、譲治文学を「人となり」と文学の渾然一致している「人格のうらづけ」のある「特異な文学」だと述べ、譲治の人格に惚れ込んでいるさまがうかがえます。

昭和29年8月の手紙には、譲治から贈られた岡山名産の白桃へのお礼が述べられています。同年12月にも岡山からお歳暮を贈られた礼状を書いています。このとき未明は72歳。未明の体の不調を心配しながら、郷里から取り寄せた贈り物を見ていた譲治の姿が見て取れます。ここ

■譲治から未明への手紙

次に、未明に宛てた譲治の書簡を紹介します。小川未明文学館の所蔵資料です。昭和28年の手紙が残されている最初のもので、未明が文化功労者の候補になったことに対するお祝いの手紙です。未明の50年にわたる骨折りをずっと見続けてきた譲治が未明の長寿を願う内容で、未明が現代の児童文学界を導いてくれる感謝を述べています。

次に紹介するのは、昭和34年、難聴のため未明文学賞の選考委員を辞題したいという内容です。議論についていけず、苦しいので許してほしいと。譲治は未明文学会が創設された頃から選考委員をしつつ代表の立場も務め、色々と手となり足となり手伝っていました。

■まとめ

未明は譲治に対し、弟子として多くは語っていません。相手は思い合い、文学に人生を賭けてきた二人。50年一緒にいてお互いに影響を受けたが支えあい尊敬しあい、これだけの理解者がいることでお互いがんばれたわけです。未明は随筆を見ると、短気であったり、飽き性であったり、癖の強い要素を持つていたと思われる。未明にとつて年下である譲治が、人格的にも惚れ込んだゆえに「私は君のことを思わない日はない」という存在であったことは、私自身心に響きました。文学的な影響もあれ



第3回文学館講座

ば、お互いの人生観の形成にも影響した。実際50数年共にしてきた歩みを総合的に見ますと、深い師弟愛で互いに支えられた二人であったと、皆さんにお伝えしたい。文学が、生きるということをいかに深く支え、子どもや若い人達の心をいかに豊かに育てているかということ。二人は、こうした価値観を刺激しあい共有しながら、子どもたちへ向けての文学の使用命感を持っていた。それを皆さんと共有できればうれしいです。

小川未明文学賞

小川未明文学賞は、日本児童文学の父といわれる上越市出身の小川未明の文学精神「人間愛と正義感」を次代に継承するため、1991年に創設されました。子どもたちの心に夢と希望を育むような鮮やかな児童文学作品を募集しています。2019年度で第28回目を迎え、これまで延べ13500編を超える作品が国内外から寄せられました。大賞作品は単行本で刊行され、多くの子どもたちに読まれています。

第28回小川未明文学賞大賞受賞

北川 佳奈さん

(大賞作品「シャ・キ・ペシユ
理容店のジョアン」)



受章のひとこと

子どものころ、じぶんは夢をかなえられないかもしれない、と気がついたときの心の痛みをずっと覚えています。

大人は子どもに、夢をもつことは素晴らしいと教えますが、かがやく未来をもつ子どもたちに、夢やぶれたときのことなどはあまり語りません。

パリの理容店で働きながら、画家になりたいという夢を持つ少年のお話を書きました。少年は若くして、「理想」と「現実」のはざまでゆれうごくことになりました。また、夢をかなえた先で、まだ悩みをかかえる画家も登場します。

子どもたちが、いつか夢をあきらめてしまいうようになったとき、この物語が胸の底の小さな火を消さないように、強い風からそつと手をかざし、守る働きをしてくれたら、こんなにうれしいことはありません。

物語の少年と同じように、私はずっと絵描きにあこがれているのですが、小川未明に関するほろ苦い思い出があります。

六年前に、本の装丁画コンテストに応募したことがありました。そのとき私は『赤い蠟燭と人魚』の話を選び、表紙の絵を描きました。そのコンテストで、審査員の方からいただいた言葉が心に残っています。

「人魚が見つめていた海には、どこかに希望があったはず」

『赤い蠟燭と人魚』はとても好きな話で、自分なりに読み込んだつもりでしたが、私が描いたのは、ただ暗くさびしい海を見つめる人魚の後ろ姿でした。人魚が見ていたものを、想像できていませんでした。私はその時、未明文学の深さに触れた気がしました。

残念ながらその絵は落選し、それ以来小川未明の名前を見ると胸がちくりとするようになりました。そんな経験があったために、今回の小川未明文学賞受賞のよるこびはひとしおでした。

小川未明は人間を描いた作家でした。人の美しさだけでなく、弱さ、醜さ、矛盾は、読んでいて苦しくなるほどです。それでも、人魚が見ていたであろう希望を伝える未明の作品は、人間愛に満ちています。そんな小川未明の名を冠した賞をいただいたことは、大変な名誉です。

この賞にたずさわるすべての方に、心より感謝申し上げます。この度はありがとうございました。

第29回募集要項

◆募集作品

- ①短編部門（小学校低学年向け）
：400字詰め原稿用紙20枚〜30枚
 - ②長編部門（小学校中学年以上向け）
：400字詰め原稿用紙60枚〜120枚
- いずれも小学生を読者対象とした創作児童文学で未発表のオリジナル作品。各部門同時応募も可。
- ・パソコン等の場合はA4用紙を使用。
 - ・表紙に題名、筆名、本名（ふりがな明記）、年齢、職業、性別、〒住所、電話番号、400字詰め換算枚数を明記。
 - ・原稿用紙2枚程度のあらずじを表紙の下に綴じる。

◆応募資格

不問（ただし、当文学賞の過去の大賞受賞者は除く）

◆応募方法

上越市文化振興課へ郵送または持参

◆締切

2020年10月31日（土）（消印有効）

◆入選作

・大賞（賞金100万円・記念品）

・優秀賞（賞金20万円）

◆発表

2021年3月上旬（予定）

*詳細は小川未明文学館ホームページをご覧ください。左記にお問い合わせください。

応募・お問い合わせ先

〒943-0832 新潟県上越市本町3-3-2
上越市文化振興課
「小川未明文学賞係」
TEL 025-526-6900
TEL 025-526-6903
FAX 025-526-6904
E-mail: minei@city.joetsu.lg.jp



文学館おはなし会 (毎月第2、4日曜に実施)



未明童話の会 「殿様の茶碗」

有名な陶器師が、殿様のために薄手の茶碗を作った。だが、殿様は手が熱くてたまらない。ある村の百姓家で出された茶碗が厚手で使いやすいのを知る…。殿様は、相手を思う心と親切心を持って作ることを陶器師に伝えた。



グループさくら 「雪とみかん」

雪国の冬、お店に「みかん」が出始めると、この話を思い出します。盲目の父とその息子の少年に、まさに天からの贈り物！心温まるお話です。



特別展おはなし会

10月27日(日)



グループ空 「野ばら」

老人と若者の友情のお話を、若い感性とコンピューターグラフィックスで描いた絵が盛り上げました。小さな子供達も静かに聞いていました。



グループさくらこうや 「曠野」

野原に立つ一本の松の木、その成長過程で起こる出来事。1人の旅人を通じて松の木が曠野の王者として自然と闘い、慕いよる者を受け入れる姿が感動的です。

作品名	担当グループ
①「野ばら」	グループ空
②「りゅうの目の涙」	シャープの会
③「泣かないキリギリス」	お話の会うさぎ
④「峠の茶屋」	未明童話の会
⑤「曠野」	グループさくら

出張おはなし会、会員加入の連絡先

〈募集しています〉

- ・未明童話の読み聞かせをしてほしい
- ・読み聞かせのボランティアをしてみたい

上越市文化振興課

〒943-0832 上越市本町3-3-2

TEL 025-1526-1690

FAX 025-1526-1690

E-mail: mimei@city.joetsu.lg.jp

のばら

vol.16

発行：未明ボランティアネットワーク
発行日：2020年5月31日

未明ボランティアネットワークだより

2019年度
の活動

- ・小川未明文学館ビッグブックシアターおはなし会……全20回、延べ参加者198人
- ・出張おはなし会（小学校、放課後児童クラブ等）…30か所、1,315人
- ・特別展おはなし会（小川未明文学館未明の部屋）……参加者33人
- ・会員の研修会（糸魚川児童文学セミナー）……参加者19人

出張おはなし会



お話の会うさぎ【牧小学校放課後児童クラブ】
「まあちゃんと とんぼ」のお話をしました。夏休みの1日を楽しんでもらいました。

シャープの会【直江津南小学校】

手作り楽器（ライアー）の演奏と共に、「高い木とカラス」「野ばら」「牛女」の朗読を行いました。音楽とお話を、静かに聞いている姿が印象的でした。



研修会

糸魚川児童文学セミナー

2019年度の会員研修会は、日本児童文学者協会主催の「糸魚川児童文学セミナー ―子どもの本を読む・見る・語る―」に参加しました。オープニングで当ネットワークの高波代表が、杉みき子/作・黒井健/絵『月夜のバス』を朗読しました。続いて黒井健さんの講演もありました。作者とその心を共有し、どのように作品を作り上げていくかというお話に感銘しました。

翌日は、絵本読み聞かせと昔話りの部屋コーナーで「きつねのおばさん」と「月夜とめがね」を、聞いていただきました。

（お話の会うさぎ）

絵本
『月夜のバス』
を朗読して

講演会開始時間、会場の照明が消えた。
スクリーンに映る絵、朗読が始まる。
静かに参加者は物語の世界へと…。（高波昭子）



「月夜とめがね」の朗読

小川未明関係資料の収集について ご協力をお願い

小川未明文学館では、未明に関する文学資料の収集に努めています。下記の資料に関する情報をお持ちの方は、ご連絡くださいますようお願いいたします。資料の寄贈については、特定の場合(すでに複数点を所蔵している資料等)を除きお受けしますので、ご不明の点はお問い合わせいただくと幸いです。

【主な収集資料】

1. 特別資料

小川未明原稿、書簡、遺品、その他自筆資料(短冊・書軸等)、写真(オリジナル)、小川未明関係者資料(未明書簡、献本など)

2. 図書

未明作品集(未明生前・没後刊行図書)、全集・選集(未明作品を一部所収した資料も含む)、初出雑誌(未明作品掲載)、未明作品の外国語訳、絵本・紙芝居

3. 参考資料

未明に関する研究論文、エッセイ、記事(雑誌・新聞等)

2020年度 小川未明文学館カレンダー

6～10月 童話創作講座(通信講座)

8月 小川未明文学館こども祭
8月22日(土)

10月 特別展「古志野実が描く未明童話絵本原画展」
会期：10月10日(土)～11月29日(日)

第29回小川未明文学賞募集締切
10月31日(土)

10～11月頃 朗読研修会(全3回)

文学館講座(全3回)

3月 第29回小川未明文学賞贈呈式(上越市)

* 通年で所蔵品を紹介する特集展示を行っています

未明ボランティアネットワークによるおはなし会
* 毎月第2・4日曜日 午後2時から文学館にて実施
* 学校等での出張おはなし会を随時実施

※新型コロナウイルスの影響などにより、延期または中止する場合がありますので、ご了承ください。

※詳細は下記へ問い合わせてください。

◆ 問合せ
〒943-0835
新潟県上越市本城町8-30(高田図書館内)
TEL 025-523-1083
FAX 025-523-1086
URL <https://www.city.joetsu.niigata.jp/site/mimeibungakukan/>



◆ 入館料 無料

◆ 休館日

毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)・
祝日の翌日・館内整理日(毎月第3木曜)・
資料整理期間・年末年始(12/29～1/3)

◆ 開館時間

火・金曜日 午前10時から午後7時
(6～9月は午後8時まで)
土・日・祝日 午前10時から午後6時

小川未明文学館 利用案内